

地域と協同の 研究センターNEWS

2018年8月25日発行
168号

【巻頭言】

7月6日「2018国際協同組合デー記念行事in愛知」を開催して

廣田 憲吾

愛知県農業協同組合中央会 参事役兼総務企画部長

まずもって、今年の風水害、そして、烈夏ともいべき気候について、お見舞い申し上げます。JAグループの一員として当行事に参加させていただいたことのお礼を一言申し上げます。

いまJAグループは、3つの危機に直面しているといわれます。その一つは、深刻な担い手不足や農業生産基盤の縮小といった「農業・農村の危機」、二つは組合員組織基盤の変容や事業取扱高・収支動向に見る「組織・事業・経営の危機」、三つは協同組合としてのJAの役割・価値への無理解といった「協同組合の危機」です。危機は太古から常に人間の足下や目前にあるものですが、その有り様は変わるといえることです。

政府は農業・農村の危機に対し“国際目線、国民目線”で捉えた提言をもとに改革を求めますが、われわれ協同組合のメンバーは“多様な組合員をつなぐ、自主・自立の原則”に立ち、所謂“不易流行＝変わらないものを守り、変えていくべきは果敢に挑む”ことを忘れずに改革を進めていかねばならないと感じます。

今回の記念講演では日本協同組合連携機構の阿高さんから協同組合間協同への期待と題し、オープンで自立した協同組合そして組合員間の連携の可能性や拡がりについて沢山の提言をいただきました。また、名古屋市立大学の向井先生からは、遊休資源の発見・利用は人のつながりのなかから、また、発信から生まれるのだという示唆をいただきました。

分散会では様々なテーマが出されましたが、私は、学びをテーマにし、JAと医療生協の学習会の事例を聴きました。歳を重ねるごとに、学ぶことから遠くなりがちな自分を振り返り“学びを通じてつながること、伝えること”の楽しさを教わりました。

協同組合間の原点は、活動領域の違いこそあれ、協同組合原則に則り、人間らしい営みを次代につないでいくことであり、違う領域の協同組合が協同する成果は自らに還り、自らを変えていくものであることを感じております。

行事に参加された各団体みなさん、準備から運営に携わったみなさん、ありがとうございました、これを機に、私自身も含めて一歩進んだ取り組みにつながるよう願っております。

(ひろた けんご)

※関連記事を4頁に掲載

CONTENTS

- 【巻頭言】7月6日「2018国際協同組合デー記念行事in愛知」を開催して/廣田 憲吾
- ▶「食と農パネルディスカッション」開催報告
- ▶2018国際協同組合デー記念行事報告「岐阜県・愛知県」
- ▶情報クリップと図書購入
- ▶企画案内：災害対策全国交流集会2018 in いわて

- 1
- 2
- 4
- 5
- 8

地域と協同の研究センター 8月の活動

- 8月2日(木) 組合員理事セミナー世話人会
- 8月3日(金) 市民講座検討会
- 8月8日(水) 研究フォーラム環境世話人会
- 8月23日(木) 第3回協同の未来塾
- 8月24日(金) 第73回生協の(未来の)あり方研究会
- 8月27日(月) 尾張地域懇談会・世話人会
- 8月28日(火) 研究フォーラム食と農世話人会、岐阜地域懇談会世話人会
- 8月29日(水) 暮らしを語りあう会
- 8月30日(木) NEWS編集委員会

「食と農パネルディスカッション」開催報告

【研究フォーラム食と農】

＝生産と消費をつなぐ＝

テーマ：ファーマーズマーケットを通して～あらためて、食と農のつながりを考える～

■ パネリスト

- ・浅田 昌司 氏 JAあぐりタウンげんきの郷 (株)げんきの郷 元支配人
 - ・吉野 隆子 氏 オーガニックファーマーズ朝市村 村長
 - ・岩森 政明 氏 ベルファーム農家市場 (株)松阪協働ファーム 代表取締役社長
- <特別参加>
- ・山口 清隆 氏 JAあぐりタウンげんきの郷 (株)げんきの郷 元代表取締役社長
 - <コーディネーター>
 - ・大原 興太郎 氏 三重大学名誉教授、地域と協同の研究センター理事

■ 開催日時 7月27日(金) 14:00～16:30

■ 会場 全労済金山会館ワークライフプラザれある 6階大会議室

《内容》

今回のフォーラムでは、JAが経営主体となって運営する日本最大規模のファーマーズマーケット「げんきの郷(愛知県大府市)」、オアシス21(名古屋市中・栄)という、大都市の真ん中でオーガニックに拘り、新規就農者を育てることを大切にしたい「オーガニックファーマーズ朝市」、官から民へ行政ではできなかったことに挑戦して地域の課題を協働で解決したいと進めてきた「ベルファーム(三重県松阪市)」夫々に特色を持った日本のトップランナーのファーマーズマーケットの代表に報告頂き、ディスカッションを行った。



地域と協同の研究センター主催企画だが、オープン参加で募集し約50名と多くの参加者があった。参加者は行政、生産者、生協の組合員・役職員、JAの関係者、大学教授、生命保険会社、外食産業の役員、製造業の技術者と、とても多彩な皆さんに参加して頂くことができた。また、福島大学に農学群食農学類(仮称)設置を準備されている福島大学教授の荒井聡氏が参加されたことで新

たな視点が議論に加わった。

パネリストの皆さんと参加者の皆さんが多様だったことで、色彩が豊かで奥行のある議論が出来た様に思う。

《ディスカッションの概要》

○げんきの郷 浅田昌司氏 山口清隆氏



げんきの郷は大府市にある。面積は6ヘクタール弱で平成12年オープン。国の補助金を若干頂き株式会社として発足。中心はファーマーズマーケットで当時は日本一の面積。売上は今21億円、年間来場者220万人。8割弱が地元の農産物、多くは地元へ還元されている。「あぐりタウンげんきの郷」全体では食と農というテーマ。地元でできたものを売る、加工する、食べてもらう。つくった方は温泉で体を癒す。

一時赤字に転落したが、利用者の声を聴くことで黒字化。利用者の声をやりきれば、利用者は満足もするし、口コミで大きな評判になる。「利用者の会」なくして、げんきの郷はあり得ない。

○オーガニックファーマーズ朝市 吉野隆子氏

オアシス 21 にあるオーガニックファーマーズ朝市。毎週土曜 8 時半に鐘を鳴らして始める。わあーっと人が来る。3 時間で約 1000 人から 1200 人が集まる。産物は持って来れば売れるが、毎年天候でいろいろなことがあり、天候には苦しめられている。1 回の朝市で百万円くらいの売り上げ。年間で 5500 万円。お正月も殆ど休まない。他に 2 カ所あるので、6 千万円は超えている。

「有機」はなかなか支援してもらえないというのが始めた動機。地産地消も頭にあり産地を限定した。当初は愛知、三重だけだった。伝統野菜も含めて大事に、地域のもを食べるのは遠くに運ばなくていいということで環境にもいい。地域の新規就農を育て、野菜を食べることを伝えたい。こういう野菜を食べてほしいと思った。

○ベルファーム農家市場 岩森政明氏

松阪農業公園、産直、スローフード、食育、緑育等を推進。松阪市が 100% 出資する財団法人として平成 16 年にスタートし、3 年後官から民への流れで㈱松阪協働ファームへ移管された。1 年目は 60 万人、2 年目以降 40 万人。60 万人を目指す。地域の課題を協働の力で解決したいと考える。食農活動を進めてきた運営主体は生産者であるが、消費者と生産者の接点になるよう努力。若い人が来るが、直売所へ来ても素通りしてしまう。理由のひとつは、野菜についてきちんと食べ方を教えられない野菜ソムリエがいないこと。単に野菜を並べているだけだと売れない。体験を通して、日常的に野菜にふれ合う機会を増やすことが大事。



○コーディネーターの大原興太郎氏のまとめ

報告の中で、未来につながる、大事なことがたくさん出てきていた。特にげんきの郷はあれだけ大きなものをつくって、色々あったと思うが、農のサイドからの発信力は大きい。赤字を経て、も



う一度利用者を組織した。

ここに「地域農業がもう一度甦るヒント」がある。利用者の方、消費者の方に支えられないと地域農業は難しい。ファンを越えて、一緒に楽しんでもらうことが大事。農業をやると結構楽しめる。連帯感も感じる。「消費者にさせたらアカン」ではなく、つながりを多様につくることが結構大事。すぐに効果がでるかどうかわからない。長い目で見て。「身土不二」、「地産地消」。その土地で育ったもので身体ができています。豪雨でもそうだが、農も壊れる。そこで食の問題を地域で解決するにはどうするか。復活させようという方々が被災地において、手伝いに行く消費者がいると力になる。日本は災害列島なので、災害はこれからも起こると考えて対処しないと、想定外は起こり得る。あり方を決めないといけない。そういうことの中で地域とのつながりを大事にすることは、それぞれの義務感ではなく、一緒にやっていたら楽しいことができる。そこにはあまりお金がなくてもやれることがある。財政はどこも逼迫している。わずかな資金をいかに、次の世代への投資にするか。子ども達への体験は大事。お互いが育つことに取り組む。それが大事。

さらに視点を大きく持ちたいのは、「あぐりルネッサンス」、「食と農」、「健康と医療・福祉」等、全部つながる視点がある。「びんぴんころり」を目指す地域のあり方。もうちょっと我々が慣れ親しんでいる情報や考え方について、これで良いのか、変えないといけないか、考えて地域で行動することが大事だということをあらためて感じたディスカッションでした。ありがとうございました。

報告：堤 英祐

(つつみ えいすけ・研究センター事務局)

2018 国際協同組合デー記念行事報告

岐阜県「2018 年度協同組合を考える集い」

岐阜県協同組合間提携推進協議会による「2018 年度協同組合を考える集い」が 7 月 6 日（金）、ホテルパーク（岐阜市）にて開催されました。参加は県森林組合連合会、県酪農農業協同組合連合会、JA 全農岐阜、JA 岐阜中央会、全岐阜県生活協同組合連合会などから約 150 名の役職員が集まりました。生協関係では、コープぎふ、岐阜県学校生協、西濃医療生協、岐阜大学生協、生協ぷちとまと、岐阜労済生協、岐阜県生協連が参加。

李侖美氏（イコンミ・岐阜大学准教授）・同協議会幹事会座長より「岐阜県の協同組合提携推進活動の歩み」が報告されたのに続き、JA 岐阜中央会から「JA 全体での全組合員訪問活動」の報告、JA 全農岐阜より「岐阜大学附属農場を活用した飛騨牛繁殖・研修センターの設立」、日本協同組合連携機構（JCA）から「同機構発足（4 月）」など、現在の取り組みを紹介しながら、直面する諸問題にいかに向き合うかが示されました。

広島大学大学院生物圏科学研究科の小林元助

教による「なぜ今、協同組合が大切なのか」をテーマにした講演は「あなたは自分の食べているものがわかりますか？その食べ物の向こう側にあるものが見えていますか？」という問いかけからはじまり、「協同の意味・協同の意義」についてもう一度考えようという提起がありました。

小さな協同から大きな協同にシフトしているが、もう一度小さな協同という考え方を見直してみるべきではというお話しでした。



愛知県「2018 国際協同組合デー記念行事 in 愛知」

愛知県では「2012 国際協同組合年」から 7 回目となる「2018 国際協同組合デー記念行事 in 愛知」が 7 月 6 日（金）、生活協同組合コープあいち・生協生活文化会館（名古屋市千種区）で開催されました。JA グループ愛知から 17 団体（県連合会等含む）、金城学院大学、ワーカーズコープ連合会センター事業団、コープあいち、南医療生協、北医療生協、三重県生活協同組合連合会、大学生協、地域と協同の研究センターなど、103 名が集いました。

記念講演として、阿高 あや氏（写真）—日本協同組合連携機構（JCA）より「日本協同組合連携機構の発足と協同組合間協同への期待」というテーマで講演があり、日本の協同組合が世界で高く評価されていることが紹介され、「広報活動は組合員向けだけではなく、外に向けて発信していくことが大切」と強調。協同組合間協同を通して認知度向上を図ることの大切さが呼び掛けられました。

つづいて、世界や日本の協同組合と地域の実践をつなげて考える提起として、名古屋市立大学大学院特任教授・向井清史氏より「人のつながりで

拓く地域の未来」をテーマに基調提案があり、「異質な組織が連携すればするほど、その効果は大きい」と連携の重要さが呼び掛けられました。

そして、実行委員会を構成する 6 つの組織から各ふたつ、計 12 の実践事例について 6 つの分科会に分かれ、持続可能な地域社会づくりのための活動について意見を交わしました。

金城学院大学から朝倉教授、柴田准教授とともにゼミ生が参加し、多様に展開されている協同（組合）の実践に触れる機会となりました。



報告：渡辺 勝弘
（わたなべ・かつひろ・研究センター事務局）

情報 クリップ



メインタイトル・特集など 刊行物名・発行所	目次・主な内容	発行年月 判型 定価 税別
<p>▶組合員に寄り添う心を大切に CO・OP共済</p> <hr/> <p>NAVI</p> <p>2018. 8 No. 797</p> <p>日本生活協同組合連合会</p>	<p>特集 組合員に寄り添う心を大切に CO・OP共済</p> <p><コープのある風景> 生協共立社 <今日も笑顔のコープさん生協の仲間のお仕事拝見> 生協ひろしま 横畑真優さん 小谷向日葵さん <想いをかたちにコープ商品> CO・OP三陸産茎わかめ <生協大好きママ コプ山さんの 教えて！CO・OP商品> CO・OPプランを使った3種チーズのクッキー <ZOOM IN 生協の店舗づくり> コープみやざき 高鍋店 <私の本ナビ> なのはな生協 <うちの生協にはこんな人がいます> 京都生協 <日本全国 宅配現場におじゃまします！> コープみえ 四日市センター <いつでもどこでも 地域とくらしを支えます> 生協コープかごしま <☆突撃☆あなたの町の組合員活動> ならコープ <この人に聴きたい> 歌手・俳優 杉 良太郎さん <ほっと navi> 東海コープ事業連合 コープいしかわ</p>	<p>2018 年 8 月 A4 判 36 頁 360 円</p>
<p>▶年金一人暮らし 高齢者に 終の棲家はあるのか</p> <hr/> <p>社会運動</p> <p>2018. 7 No. 431</p> <p>市民センター政策機構</p>	<p>特集 年金一人暮らし高齢者に終の棲家はあるのか</p> <p>I 自分らしい最期を考える FOR READERS 老後破綻の時代における「無届けホーム」という「光」 見守りとサポートがあれば、自分らしい住まい方はもっと広がる 社会福祉法人いきいき福祉会理事長 小川泰子 超高齢多死社会で最期を迎える場所を考える 立川在宅ケアクリニック院長 荘司輝昭 なぜ認可を受けずにグループリビングを開くのか 特定非営利活動法人結いのき専務理事 井上肇 「年功賃金と貯蓄による老後」モデルからの転換へ 都留文科大学名誉教授 後藤道夫</p> <p>II 自立をサポートする住まい 自由・安心・つながりのある「21 世紀の長屋」 サポートハウス和 ドヤをリノベーションした山谷のケア付き宿泊施設 山友荘 自分たちが作った理想の住まいに役所の「お墨付き」は不要 グループリビングえんの森 地域で暮らすための応援拠点 生活クラブ風の村 きなりの街すわだ 介護保険制度の枠外の経験を生かして高齢者の新たな寄宿舎を グループリビングCOCO結いのき・花沢</p> <p>III 終活用実践ノート 一人暮らし高齢者が自分らしい「最期」を迎えるために—エンディングノートの書き方 ワーカーズコレクティブ生活クラブFPの会 羽場真美 藤井智子 介護施設の基礎知識 いざという時、あわてないために 認定NPO法人市民シンクタンク ひと・まち社事務局長 松浦恵理子 施設選びは「看取り」に対する姿勢を見る—幸せに死ぬために必要なこと 作家・作曲家 たくきよしみつ</p> <p>連載 韓国語翻訳家の日々 子育ては続くよ 第4回 「ママ虫」と罵られた女性が書いたベストセラー小説 韓国語翻訳家・ライター 斎藤真理子 悼みの列島 日本を語り伝える 第8回 読谷、摩分仁で考えた、沖縄戦のこと。 ライター 室田元美</p>	<p>2018 年 7 月 A5判 156 頁 1,000 円 (税別)</p>

メインタイトル・特集など 刊行物名・発行所	目次・主な内容	発行年月 判型 定価 税別
<p>月刊 J A</p> <p>2018. 8 vol. 762</p> <p>全国農業協同組合中央会</p>	<p>スゴイ農業、スゴイ J A J A 自己改革の現場から 小菊栽培などメガ団地を起点とした「農」と「地域」の未来づくり — J A 秋田しんせい（秋田県）の小菊など園芸品目振興の取り組み J A 全中 広報部</p> <p>J A ・農政トピック 記念日を起点とした J A ファーマーズマーケットの活性化と情報発信について — 10 月 2 日「直売所（ファーマーズマーケット）の日」の制定 J A 全中 広報部</p> <p>きずな春秋—協同のこころ— 童門冬二</p> <p>私のオピニオン 海外だより [D.C.通信] 連載 87 貿易戦争が農産物貿易に及ぼす影響 — 中国のアメリカ産大豆関税引き上げ措置を事例に 吉澤龍一郎</p> <p>手のひらにのる幸せ 息子の成長を頼もしく感じた 7 回目の田植え 河瀬直美</p> <p>J A トップインタビュー 「米プラスα」で農業所得増大へ 大坪輝夫（宮城県 J A みどりの 代表理事組合長）</p> <p>展望 J A の進むべき道 「組合員とともに」に確信をもって臨む 比嘉政浩（J A 全中専務理事）</p> <p>第 31 回 広報活動優良 J A 紹介 組合員向け広報誌の部 優秀賞 / J A いわて中央（岩手県）</p>	<p>2018 年 8 月 A 4 判 48 頁 年間予約 5,109 円 (消費税込)</p>
<p>▶地域の居場所</p> <p>生活協同組合研究</p> <p>2018. 8 vol. 511</p> <p>公益財団法人 生活協同組合研究所</p>	<p>■巻頭言 地域の「居場所」考〜その光と影とその先へ〜 小林新治</p> <p>▶特集 地域の居場所 都市近郊における地域社会の分断と再生 石田光規</p> <p>地域福祉拠点の形成と地域共同ケアの推進 藤井博志</p> <p>子どもや若者の居場所づくりの意味 佐藤洋作</p> <p>たすけられ上手・たすけ上手の地域づくり、地域育て 上野谷加代子</p> <p>コラム 1 エフコープ「地域活動の場」のめざすもの 沖 一郎</p> <p>コラム 2 いばらきコープが社会福祉協議会・ J A と連携し 運営する「ほぺたん食堂」 渡部博文</p> <p>コラム 3 今こそ、地域支え合いを考える 池田昌弘</p> <p>■研究と調査 NPO 法人くらし協同館なかよしの取組 — 「ふれあい」「生きがい」「支えあい」 — 薬師寺哲郎</p> <p>■時々再録 きつきのきつき—大分県杵築市の地域再生 白水忠隆</p> <p>■本誌特集を読んで（2018・6） 山下福太郎・天野恵美子</p> <p>■新刊紹介 三浦まり編『社会への投資』 山崎由希子</p> <p>●第 28 回全国研究集会のご案内（10/13） ●公開研究会（9/4・京都）</p>	<p>2018 年 8 月 B5 判 72 頁</p>

メインタイトル・特集など 刊行物名・発行所	目次・主な内容	発行年月 判型 定価 価額
<p>▶ 核兵器のない未来へ</p> <hr/> <p>文化連情報</p> <p>2018. 8 No. 485</p> <p>日本文化厚生農業協同組合連合会</p>	<p>農協組合長インタビュー (48) 42 年間続く 協同活動強化運動 いま協同組合への期待と可能性の時代に 第 14 回「厚生連医療機器・保守問題対策会議」「LCC 紙上セミナー」開催</p> <p>院長リレーインタビュー (304) 住民の願いに応え広域エリアで医療介護の複合展開</p> <p>二木教授の医療時評 (162) 「骨太方針 2018」と「社会保障の将来見通し」の複眼的検討</p> <p>核兵器のない未来へ——被爆者として生きる 文化連創立 70 周年 (4) 関東地区厚生連医療材料共同購入委員会創設の頃 JA はだの自己改革の実践 多様な福祉レジャーと海外人材 (5) 外国人住民と介護</p> <p>韓国農業の実相——日本との比較を通じて (24) ローカルフードの実践 厚生連病院における質の高い臨床研究を目指して 第 4 回厚生連病院臨床研究研修会報告 住民主体ですすめる「安心」の地域づくり —ふれあいサロン hinata bocca とよさと— 岡田玲一郎の間歇言 (149) 米国のヘルスシステムとわが国の病院・施設のグループ化 厚生連病院への私見</p> <p>野の風●合気道の不思議な力と老化防止効果について デンマーク&世界の地域居住 (111) 協議体づくりを市がリード (福岡県福津市): 2 熱帯の自然誌 (29) 入れ墨の風習 イギリスの病院 (1) 医療提供機関の概況</p> <p>□書評 クララ・ツェトキーン —ジェンダー平等と反戦の生涯—/小磯 明 □書籍紹介 佐久の大番頭 農村医療にかけた佐々木真爾/夏川周介 □自著を語る 賢い患者/山口育子</p> <p>▶ 線路は続く (125) 夏の山陽電車の思い出/西出健史</p> <p>▶ 最近みた映画 ファントム・スレッド/菅原育子</p>	<p>2018 年 8 月 B5 判 88 頁 文化連情報 編集部 03-3370-2529 *注</p>

地域・協同の運動、協同組合に関する文献資料、協同組合・生協関係の研究所などの調査研究成果や研究センター会員の研究成果などから、比較的入手しやすいと思われるもの、寄贈いただいたもの(♣)などを中心に順不同で紹介しています(主な内容は目次等から事務局が要約しています)。詳細は研究センター事務局までお気軽にお問い合わせください。

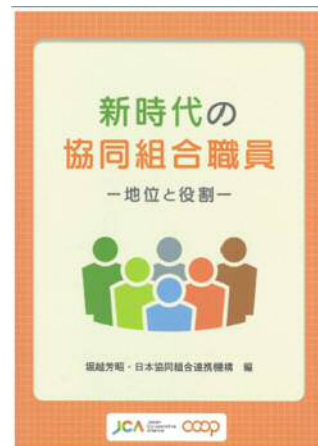
研究センターの図書購入

「新時代の協同組合職員」—地位と役割—

堀越芳昭・日本協同組合連携機構編集、発行：全国共同出版株式会社
第 1 回「協同の未来塾 (6 月 22 日)」にて、関西大学・杉本貴志先生よりご紹介いただきました。生活協同組合コープみえ、同コープあいちと一緒に共同購入し、研究センターでも 3 冊購入しました。

序章：協同組合職員の地位と役割…堀越芳昭、第 I 部：協同組合の職員を考える…田中夏子氏ほか 4 名、第 II 部：協同組合ではたらく…毛利敬展氏ほか 9 名、終章：協同組合の協同の意義と特質…堀越芳昭、付録：「JA 職員の意識と行動にかかわるアンケート調査」基本データ

※ご希望の会員には貸し出しも致します。事務局までお問い合わせ下さい。



岩手のたたかいに学ぼう

被災者・被災地の声を生かした人間復興

災害対策全国交流集会 2018 in いわて

期日：2018年11月11日（日）～12日（月） 一日目 13:00から 二日目8:30から

会場：三陸花ホテルはまぎく（岩手県大槌町波坂海岸）TEL0193-44-2111

参加費：3,000円（1日のみ2,000円）宿泊費：15,000円（1泊2食）

申込み締切：10月10日

全体集会 11月11日（日）13:00～17:50

記念講演 「東日本大震災から8年目の今を考える」

齋藤徳美・岩手大名誉教授・岩手県復興委員会総合企画委員長

シンポジウム 被災者、被災地に声を生かした復興

分科会 11月12日（月）8:30～ 第1分科会：被災者本位の復興と支援を考える

第2分科会：福島原発事故と原発再稼働を考える 第3分科会：被災者の住まいとまちづくり

第4分科会：地震や豪雨にどう備えるか防災を考える 第5分科会 被災者に役立つ支援制度

*オプション被災地バスツアーあり 主催：全国交流集会

2018in いわて（全国災対連・東京災対連・復興岩手県民会議・

みやぎ県民センター・宮城災対連・ふくしま復興共同センター）

連絡先：全労連会館4階全労連気付

TEL03-5842-5611 FAX03-5842-5620

Email：saigai-shien-kaizen@zenkoku-saitairen.jp



168号の挿入チラシで紹介している報告・企画予定

- 1) 9. 8公開セミナー「人口減少・少子超高齢の未来社会にどう備えるか」
- 2) 「市民・組合員が協働を学びあう講座企画」二次案内
- 3) 「研究フォーラム環境企画」開催のご案内—豪雨・洪水・土砂災害・猛暑…持続可能な地域における「森」の役割・機能を考え合うフォーラム
- 4) 南伊勢のみかん 田畑の楽校2018
- 5) コープあいちの企画紹介

「楽しく食べる食育で子どもが伸びる」、なぜこんなことで、騙されてしまうのか —悪徳商法の被害に遭わないために—

地域と協同の研究センター 9月の活動予定

9月1日（土）第3回共同購入事業マイスターコース	9月13日（木）	三重地域懇談会世話人会
9月3日（月）市民講座検討会	9月21日（金）	第4回協同の未来塾①
9月8日（土）東海交流フォーラム第1回実行委、公開セミナー※	9月22日（土）	第4回協同の未来塾②
9月12日（水）協同組合間協同相談会、三河地域懇談会世話人会	9月25日（火）	第4回常任理事会
	9月26日（水）	環境フォーラム「森を考え合う」※
	9月28日（金）	第1回組合員理事セミナー

※印は挿入チラシをご覧ください

地域と協同の研究センターNEWS168号

発行日2018年8月25日定価200円（税・送料込み）

年会費には購読料が含まれています

発行 特定非営利活動法人 地域と協同の研究センター 代表理事 西川 幸城

〒464-0824 名古屋市千種区稲舟通1-39 TEL 052-781-8280 FAX 052-781-8315

E-mail AEL03416@nifty.com HP <http://www.tiiki-kyodo.net/>